
失いし物よ

ナツキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失いし物よ

【Nコード】

N0686B

【作者名】

ナツキ

【あらすじ】

新一が記憶を失くす話です。新一が失った物について書いていきます。

プロローグ

俺の名前は分からない。

どこに住んでるのかも分からない。

何もかも思い出せない。

ただ・・・一つだけ

覚えているものがある。

空手をやってる髪の長い女。

「新一!!」

今日もその女は

俺を訪ねにやってきた。

季節は秋。

外は紅葉がとてもきれいだった。

女はいつも学校のことを話してくれる

全く分からないが楽しくて

なんだか心地よいのだ。

俺が失った物。

それは・・・17年間すべての記憶だった・・・

プロローグ（後書き）

ナツキです。

初めての小説が連載でいいのか分かりません。

けど、頑張ってかきますので

読んで下さいね（ハ、U、●）ノ

1 あれは晴れた朝だった（前書き）

下手です。

1 あれは晴れた朝だった

新一の記憶が無くなったのは

十月中旬

とても晴れた朝でした……。

・・*・*・*・*

「おはよう、新一。」

「おはよう。」

私達はいつもの様に学校に向かって歩いていた。

「ふわぁぁあ。」

「新一、眠いの？」

「ああ、ちよつと寝不足気味。」

「そうなんだあ。」

私達は、赤信号だったので止まった。

普通の朝だった。

新一のホームズ話を聞かされて

私は少しむっとした。

「悪い、話しすぎたな。」

「ううん。」

パツと信号が青に変わる。

私は新一と横断歩道を渡ってた。

キキイイイイイイ！！

「えっ……。」

「蘭！！」

バンツ！

ドンツ！！

一瞬の出来事だった。

いきなりトラックが突っ込んできて

私が轢かれそうになったのを

新一がかばってくれたのだ。

「新一！！」

新一は血を流して倒れていた。

「新一！新一！」

新一は反応してくれなかった。

「いやあああああ！！」

横断歩道は

新一の血で赤く染まった。

「誰か・・・誰か・・・。」

私は、パニック状態で

何もできなかった。

ギュッ

「え・・・・・・。」

「バーロー・・・泣くなよ。」

「新一！！」

「お前の泣き顔なんて・・・うつ！」

新一は頭を抱え込んだ。

「新一!？」

「う・・・う・・・。」

新一はとても痛そうだった。

「誰か・・・誰か救急車を!！」

もう叫ぶしか無かった。

新一を見ていられなくて

涙が溢れてきた。

ピーポーピーポー

救急車の音だ。

「頑張れおにちゃん！」

「頑張って！」

みんなが新一を応援していた。

みんな、生きて帰ってくることを願っていたのだ。

高校生探偵工藤新一を・・・。

1 あれは晴れた朝だった（後書き）

ナツキです。

文章下手&短くてすいません！

もっともっと頑張ります！

評価下さい。

2 記憶の迷路

新一は救急車で運ばれてから

手術室に運び込まれ

私は手術室の前で待っていた。

椅子に座って

手を組んで

『新一が助かりますように……。』

そう願いつづけた。

新一がいなくなったら

私……。生きていけないもの。

・・*・*・*・*・*

「新一!!」

手術が終わった後

病室に運ばれた。

私は、新一のお父さんとお母さんに電話した。

今、ロスからこっちに向かつてるはずだ。

「新一・・・目を開けてよ。」

私は新一の手を握った。

病室は二人つきり。

静かすぎる病室。

荒い息の新一。

「・・・お願い、新一。」

ピクッ

「え・・・？」

新一の指が動いた。

「新一．．．．？」

新一の目が開いた。

「新一！？」

「え．．．．？」

「ここ．．．．病院よ。」

「．．．．．。」

「私を助けるために車に引かれたの。」

「．．．．．。」

「よかった．．．．よかった．．．．。」

「お前．．．．誰だ？」

「えっ．．．．？」

「俺は・・・誰だ？」

「新一・・・？」

「・・・俺は、誰なんだ？」

「新一！？」

新一の様子がおかしい。

私はナースコールを押した。

「はい、どうしました！？」

「新一の・・・記憶が無いんです。」

「え・・・急いで先生を呼んできます！！」

タッタッタ

看護師さんが走る音が

私の頭に鳴り響く。

「なあ・・・。」

「何・・・新一？」

「俺の名前は？」

「工藤新一・・・高校生探偵よ。」

「探偵・・・？」

「ええ、とっても有名な名探偵よ。」

「お前の名前は？」

「毛利蘭。あなたは蘭って呼んでたわ。」

「そっか・・・。」

何も覚えてない新一を見てたら

涙がポロポロこぼれる。

「蘭……。」

新一は私の頭に手を置いた。

「ごめんな、俺のせいだな。」

「新一……。」

記憶が無くても

新一は新一だった。

「大丈夫、少しでも覚えてることは無いの？」

「えっと……。」

新一は話し始めた。

「空手をやってる長い髪の女。」

「えっ……？」

「お前だよ……蘭。」

「うそ……。」

「名前とかは思い出せなかったけど。」

「私・・・？」

何も覚えてないと思った。

一つだけ思い出せるものが私だなんて

嬉しかった。

また・・・泣いてしまった。

「工藤君、君の担当医の中井です。」

「どうも・・・。」

「脳の検査をしたいから、検査室にどうぞ。」

「はい・・・じゃあな、蘭。」

「うん・・・。」

新一の歩き方。

新一の話し方。

新一の後姿。

記憶が無くても

新一はかつこよかった。

私が・・・

私があなただの記憶を戻してみせるから。

2 記憶の迷路（後書き）

下手すぎます。

あー！！

もっと上手になりたいです・・・。

3 前に進んで？

新一の記憶が無くなってから三日。

私は毎日病院に通った。

文武両道でさえ疲れるのに

私は毎日くたくただった。

けど、責めるなら自分を責めて

私のせいで新一の記憶が・・・

私はこみあげる涙を耐えて

病院に入った。

・・*・*・*・*・*・*・*

ガラッ

「新一。」

「あっ、蘭。」

新一の病室には

新一のお母さんとお父さんがいた。

「蘭ちゃん、毎日ありがとう。」

「そんな、お礼なんていりません。」

「ありがとう。」

「いえいえ……。」

『ありがとう』

なんでそんなこと言うの？

私が記憶を奪ったのよ……？

私のせいで……

新一は……新一は……

「じゃあ、私達出るわね。」

「ああ、じゃあな。新一。」

「ああ。」

ガラッ

「・・・新一、何か思い出せた？」

「・・・何も。」

「そっか・・・。」

新一の病室には

クラスメイトからの千羽鶴が飾ってあった。

もちろん、私からの提案で

300は私が折ったのだ。

「・・・なあ。」

「ん？」

「ファミレス行っただろ？」

「ええ!!」

「当たった？」

「どうして!？」

「えっと・・・口にナポリタンのソースが。」

「えっ！けど、それだけ？」

「後は・・・勘。」

「勘？」

「なんか・・・思いついたっていうか・・・。」

私は、新一とファミレスに行ったら

大抵はナポリタンを頼んでた。

まさか・・・それで？

だって、オレンジ色のソースなんて

他にもあるもんね・・・。

記憶は無くても

やっぱり少しは分かるんだね。

「・・・ごめん。」

「えっ？」

「本当は、推理しようって思ったんだけど。」

「無理じゃなくていいからね？」

「ごめん……。」「

謝らないでよ。

謝らなきゃいけないのはこっちだよ？

謝らないでよ。

謝られたら泣いちゃうよ。

「……前に進んで？」

「えっ？」

「ちよっとづつ……。ちよっとづつでいいから。」

「蘭……。」「

「明日は土曜日だし、部活も無いから、昔話してあげる。」

「ありがとう……。」「

なんで言うの・・・。

けど、ありがとう。

こんな私に感謝してくれてありがとう。

本当に・・・ありがとね？

「痛い・・・痛い・・・。」

「新一？」

「うわああああ！！！」

「新一！？」

私はすぐにナースコールを押した。

「新一が、頭痛いって言ってて・・・どうしよう！！！」

『落ち着いて下さい！すぐに先生呼びますから！』

「痛い・・・痛い・・・。」

「新一！」

「ら．．ん．．．。」

「何？何？」

「な．．くな．．。」

「え．．．？」

バタッ

「新一！！」

新一は倒れてしまった．．．。

空は綺麗だった。

どうして．．．？

新一は苦しんでるのに

どうしてあなたは綺麗なの？

神様、教えて下さい

どうして彼がこんな目に遭うの？

なんで私じゃないの．．．？

3 前に進んで？（後書き）

蘭の苦しみが書きにくい・・・
投稿遅すぎてゴメンなさい！！
ストックが全然無いんですへへ；
頑張りますので、評価ください！

4 現実と向き合う

” ありがとう ”

” ごめん ”

そんな言葉、私は要らない

欲しくないの

自分の負担になって困る・・・

肩の荷が下りない感じがして・・・

ウィーン

治療室に運ばれた新一は帰って来た

まあ、寝てたけどね

担当医の中井さんは私に言った

「新一君、記憶が戻りかけてるんだ。」

「本当ですか!?!」

「ああ、ただ・・・まだ時間が必要だね。」

「そうなんだ・・・。」

「なにかきっかけさえあればいいかもしれない。」

「きっかけ・・・。」

私の頭に浮かんだ場所

”トロピカルランド”

もしかして・・・あそこなら

けど・・・そこに行けば記憶が戻るだろうか

私は、新一が目を覚ますのを待つことにした

「ん・・・。」

新一が起きそうだったので、すぐに呼びかけた

「新一！」

「・・・蘭。」

私は、新一の頭を何回も撫でた

新一はキョトンとした顔で私を見つめた

その顔はとても愛しかった

「早く・・・記憶が戻りますように。」

「蘭・・・。」

新一は顔を赤くしながらありがとうと呟いた

その時の新一はあまりにも可愛かった

どうしてこんな人を事故に合わせてしまったんだろう

どうしてこんなにも優しい人を傷つけてしまったんだろう

「蘭、お前・・・事故のことでも考えてるのか？」

「え・・・？」

「だって、表情カオ・・・暗いぞ？」

必ず頭に浮かぶのはあの事故のこと

事故に遭う前までは、新一にも記憶があつたのに

何で・・・？

「ううん、何でもない。」

「そっか、俺もそろそろ退院出来るからさ。退院したらどっか行こうな？」

「・・・うん。」

新一の気遣いがとっても嬉しいの

それに、記憶が無くても変わらない新一が目の前にいるんだもん
もっと、楽しまなくっちゃ

「トロピカルランド行かない？」

「トロピカルランド？」

「うん。退院したら行こう？」

「ああ、いいぜ。」

大丈夫、もう平気だよ

ありがとうございます

肩の荷なんかにならない・・・

むしろ、助けられてる気がする・・・

自分を責めたりしない、現実と向き合って

新一の記憶を頑張って取り戻してみせる・・・

「新一ね、私が小さい頃かくれんぼしてて出れなくなっちゃったんだ。」

「どこに隠れたんだ？」

「体育館の、いすをしまう所！」

「ハア？そんなとこに隠れたら誰も見つけてくれねーじゃん。」

「ううん、ちゃんと見つけてくれたんだ。」

どんな時でも私の傍にいてくれたあなたが

私を見つけてくれたんだよ・・・？

「誰が？」

「・・・新一が、見つけてくれたの。」

「・・・俺？」

「・・・うん。」

新一は少し照れくさそうにして、そっぽを向いた

その日は空が水色で綺麗でした・・・

4 現実と向き合う（後書き）

次から新展開になったらいいですね。

なんだあ起承転結を無視してしまってる気がします。

今・起くらいですよねえ。

次から承にいったらいいですねえ。

これからはレスしますから、評価お願いします。

応援してくださいっているみなさん、ありがとうございます。

パソコン禁止令がとけたので、これからはなるべく投稿するようにします！

5 暗黒の手紙

今日も病院で朝を迎えるのか

いい加減退院したいが、足もまだ治っていない

記憶だって戻りかけているらしいが、そんな気はしない

俺は、松葉杖を使って歩きカーテンを開けた

今日もいい天気だ・・・

「工藤さん、開けますよ。」

「はい、どうぞ。」

ガラッ

看護師さんは、笑顔でおはようと言ってくれる

業務的だと分かっていても、やはり嬉しいものだ

あいさつは人を不幸にはしないだろう

「これ、あなた宛よ。差出人が書いてないんだけど。」

「ありがとうございます。」

「じゃあ、検査は11時からだから。ご飯を食べて元気つけなさい。」

「はい。」

「彼女は午後來るのかしら？」

「彼女？・・・ああ蘭ですか。はい、来ますよ。」

「彼女のためにも、記憶が戻るといいわね。」

「はい、頑張ります。」

「よし、じゃあ朝食持ってきてあげるわ。」

「いいですよ、自分で持ってきます。」

「いいのよ、あなた足怪我してるじゃない。」

看護師さんは、笑顔で朝食を持ってきてくれた

こんなにも優しい人がいる病院で良かったと

心からそう思う新一だった

「それにしても、真っ黒な手紙だなあ。」

封筒は真っ黒だった

まるで漆黒のような・・・不吉な予感がする

少なくとも、蘭や父さん、母さんでは無いだろう

俺は、手で慎重に封筒を破った

「え・・・？」

中には小さな紙切れが一つ

新一は紙切れを広げてみた

見る見るうちに表情が青くなる新一

「・・・いたずらか？」

それとも、本気なのだろうか

ただ・・・いい気持ちはしねえな

「・・・はあ。」

記憶喪失になる前の新^{オレ}一は、人に恨まれるような奴だったのか？

俺は・・・どんな奴だったんだ

「蘭・・・。」

手紙の中身はこうだった

『カノジョヲワタセ。』

カタカナで書かれたふざけた文章に新一は少し腹を立てた
もぐもぐと冷めた病院食を食べる新一

「まずいな・・・。」

相変わらずまずい病院食を我慢しながらも全部平らげた新一
さっきまで何も無かった空に少し雲が覆う

不幸はまだ、始まっていなかったのだ

何かが起こる・・・

5 暗黒の手紙（後書き）

久しぶりの更新です。

全然更新できなくてごめんなさい。

これから頑張って更新しますね。

評価、感想よろしくお願いします。

6 大阪からの訪問者

俺は、手紙の文章をジッと見つめてみた。

彼女って、多分蘭のことだよな？

「何でだよ」

新一はふてくされたように、ベットに横になった。

ああ・・・暇だなあ。

蘭が持ってきてくれた推理小説。

犯人が簡単すぎてつまんない・・・というより、もう知ってるような。

無理もない。

蘭は新一の家から小説を持ってきたのだから。

「だああああ！！！！」

あまりにも暇すぎて思わず叫んでしまった。

コンコン

おそらく看護師さんだろう…

無理も無い、病院なのに騒いだのだから

そう思っていた…

ガチャ

「ようゝ工藤！！元気にしとったか??」

「工藤君、久しぶりやなあ。」

どこかで見たことがあるような大阪弁の二人。

聞きづらかったが、俺はとりあえず名前を聞いた。

服部平次

遠山和葉

二人の名前をしっかりと頭に入れる。

「お前、ホンマに記憶喪失なんか？」

「ああ、治りかけてるらしいけど」

「あんま無理しちゃアカンよ。蘭ちゃん、心配するで?..?」

ズキン

胸がなぜか痛む。

蘭を心配させてるんだよな、俺。

そうだよな、迷惑もかけてるんだよな。

「和葉!! こいつにそんなこと言ったらアカンやろ」

「ゴメンなあ!! そんなつもり無かったんやで」

「ううん、いいよ」

「ところで、なんかあったんか?..?」

「え?」

「いや、なんとなくなんやけど」

新一は、先ほどの紙を平次に見せた。

平次と和葉の表情は、みるみるうちに曇っていく。

「なんやこれ!!」

「脅迫状!?!」

「蘭って、恨まれたりするような奴じゃないよな?」

「あたりまえやないの!!」

「俺もそう思うで、工藤」

もしかして、俺のせい??

俺のせいで蘭が狙われているのか??

…ゴメンな、蘭。

「工藤、ねえちゃんのこと守ってやってや」

「ああ、分かってる」

「工藤君、頑張ってた?」

「おう!!」

俺：多分だけど、

蘭のこと意識してるんだと思う。

あの笑顔を見ると、心臓がドキドキするんだ。

「ほな、また来るわ」

「せやな！！ほな、お元気で♪」

「ああ、二人も気をつけて」

新一は笑顔で手を振った。

そして、蘭を守ってみせると心に誓った。

6 大阪からの訪問者（後書き）

久しぶりです。

ナツキです。

パソコンを三ヶ月禁止されていたため

なかなか更新できませんでした。

こっそりやったりしたんですけどwww

文を少し変えました。

メッセージで、台詞に。はいらないなど

いっぱいご指摘を頂いたので、全文書き直しました。

これからは受験生なので、なるべく月に一回は更新できるように頑張ります!!!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0686b/>

失いし物よ

2010年10月11日00時24分発行